

ニッポン

PR 司報 年 4 回元行

新たな装い

MP T II 33 型
床面鋸仕上機



型 式	MPT-33型
回転翼の直径	840mm (33")
ブレードの寸法 と 枚 数	幅 178mm、長 330mm 4 枚
ブレードの回転数	85~120r.p.m
使用エンジン	ミカサEY18-3D、5PS 自動遠心クラッチ付
重 量	85kg

作業現場を見て

よって、水平になるようセットする。

次にビーム本体をその上に乗せボールをベニヤ板に通し、チャックにセットする。そしてパワーユニットを全開にして徐々にハンマーヘッドを降ろして打ち込んで行くのである。アスファルトを打ち抜くのに多少時間がかかるが、それをすぎるとスムーズに打ち込む事ができた。

チャックは現地で作られた物でボールのヘッド部のアールのついたキヤップを潰さない様に旋盤でキヤップと同じアールを取り、ビールを詰めて使用された。

以上の様な手順で、次から次へとボールが順調に打ち込まれて行くのを心地よく眺めながら、機械というものは工夫次第でこんなにも見事に働かせるものかと感心させられた。

小谷報



東南アジアの近況

此の度、三週間の予定でインドネシア及びマレーシアの各地にある各代理店を訪問して、販売協力並びに市場調査を行う目的で四月二十五日羽田を出発した。

海外に出かける方々には、良くあることだが、空港に降りたとき、たんに、まずその国のにおいを感じ、興奮と期待で胸が高鳴るのを覚えることがある。それも先進国の近代的に整備された空港であればさほどではないが、ローカル線のような国際空港であればあるほど、その興奮の高鳴りも大きく感じられることがよくある。それにしても、今のジャカルタは、以前に比べてはるかに高鳴りを感じなくなってきた。それはインドネシアも他の先進国と背を並べるほど近代的な様相を持つようになったからだと思ふ。

インドネシアを略して良くネシアと云う人がいるが、これは正確な呼び方ではないようである。なぜならネシアのつく地名は数多くあり「ネシア」とはギリシア語で島を意味するからだとはいわれる。従ってだれでも想像がつくように「インドの島々」を意味する国がインドネシアである。大小三〇〇〇以上の島々からなる群島の国インドネシアであり、四面海に囲まれている関係から水産資源に恵まれているインドネシアでもある。

このように水産資源が豊富にあるのに、漁と漁法のたれ遅れから、未だに資源が十分に利用されていないというのが実状のようである。又この水産資源に加えてゴブラ、ゴム、パーム油、砂糖、茶、胡椒、木材などの生産国でもあり、更に今日では地下資源である石油が発見され、同国の経済発展に大きく寄与している。ところが、スマトラ、カリマンタン、西イリアンに埋蔵されている膨大な石油、石炭、鉄鉱石、ニッケル、マンガン等の大部分が今だに未開発のまま残されているというのである。

東南アジアの中で一番資源に恵まれた国はどこかと問うたなら、それは中国を除いてはインドネシアと明確に答えられるほど資源が豊富にあるにもかかわらず、工業化への進出が他の国に比べて若干立ち遅れているため、インドネシア政府は、躍起になって、この無尽蔵に近い資源を開発すべく、目下海外企業とジョイントによる資源開発を計画し、数年来積極的な取組んでいるのである。このような状況から外国企業は競って



近代化のビルが建ち並ぶ最近のインドネシアの首都ジャカルタ

インドネシアに進出する一方、政府もまた、工業化を促進すべく、色々の政策を打ち出している。海外からの企業進出を歓迎しているわけである。こうした政府の工業化促進政策に基づいて、いままで単に売り手市場であつただけでなく、買い手市場であるメーカもこの将来性ある市場を確保する必要性から加工製造による販売に切りかえて、現地企業とのジョイントにより積極的に工場を設けるようになって、来たようである。

ところが、この傾向が華僑を刺激したかどうかは明瞭でないが、以前は商業資本を主体としていた華僑も最近では産業資本に資金を投資し、政府の工業化促進策の一端を担って工場運営を行ったり、海外企業とジョイントで企業を設立するなどインドネシアに進出する意欲が良くなつてきている。

だけを見る限りは綺麗になり、高層ビルが建ち並んで、近代的な様相を思わせるほどに発展していった。それも首都ジャカルタは第二次大戦後、急速に発達した街で、オランダ統治時代はバタビアと呼ばれていた。北部の中心はコタキナでその周辺がいわゆるオランダと呼ぶ。華僑で、工具商、小型機械を扱う小売商などが散在している。そして新市街として各国の経済援助や日本の賠償でつくられたサリナ・デパティ、ホテル・インドネシア等を中心とした近代的なビルが林立している。最近ではジャカルタ市周辺の開発と地方都市の開発に力を入れているといわれ、郊外には高級住宅の建設が進められていて、ゆったりとした敷地に熱帯樹を配し、いかにも南国らしい風情をただよわせた住宅がすでに完成され、そのいくつかのブロックが見受けられた。

このように開発が急ピッチに進められているだけに、最近半年もインドネシアを訪れていない人には、今のインドネシアを語る資格がないとまで言われる意味が良くなつてきている。

三笠代理店のC社を訪問、パンパン社長と三笠製品の販売状況と今後の販売計画について話した。そしてこの豊富な埋蔵されている資源の開発に力を入れている三笠の意気を感じ、この新興国の将来に多くの期待を寄せながら、次の出張地であるマレーシア、サラワク州の州都クチンに向かった。

クチンから同行する手筈になっていたS社の佐藤専務と、シンガポール空港で合流し、クチン空港に着くと、空港には三笠代理店のC、A、S社長と三笠製品の販売状況と今後の販売計画について話した。そしてこの豊富な埋蔵されている資源の開発に力を入れている三笠の意気を感じ、この新興国の将来に多くの期待を寄せながら、次の出張地であるマレーシア、サラワク州の州都クチンに向かった。

クチン市はシンガポールに近く、ボルネオ島のマレーシアに属する東マレーシアの一部であり、サラワク州の州都で港街として栄えている。人口十一万のクチンは近代的なビルディングが散在している。町から一歩郊外に出ると、ヤシやゴムの林、コショウ畑が延々とつづいていて、マレー半島の他の町と異なっている風景が見られる。しかし街の裏道に入ると相変わらず華人独特の二階建ての商店街が密集している。

三笠代理店のC社工場長チャン氏から三笠製品のデモンストレーションに依る説明を受けた。S社の佐藤専務



クチンの三笠代理店C社のショールームにて
左よりチャン社長、筆者

の許可が与えられたのは全く救われた思いであった。

ボルネオは人口十四万、実に立派な空港、完全に整備された舗装道路、そこに金色のモスクが輝いている。このモスクとは対照的に庶民の水上家屋も建ち並んでいる。こうした通りを歩くと都心の感じではあつたが、政府はなお郊外開発に力を入れているといわれているので、今後はそれに伴って古いビルを建て直す事も多くなるものと思われ

三笠代理店H、T社を訪問、タム・キム社長と三笠製品の販売状況、将来性について会談した。同社は公共事業に強いコネを持っていて、このことから新機種の取扱いは非常に積極的であった。

サンダカンには北ボルネオに属し、現在わが国への木材の搬出の中心地として三笠代理店S、T、G社を訪問、総支配人リッキー氏と会談した。同氏は市内の開発をすすめるにも、市を背にしている関係から開発も容易でなく、郊外開発となると行政州であるコタキナバルの方が先行する。しかし同社は各州に支店を設け、多くの販売員を備えているので、新機種の取扱いは非常に積極的であった。

クチン市内のホテル建設現場で使われている三笠パイプ、ウオーター、右よりC社社長、ウオーター現場監督、筆者

クチン市は東南アジアのうちに一番社会福祉の行きとどいていて、都市に空港、高層ビルなど、建設の工事になると外国から業者が進出して来るのを請負うケースが多く、その場合必要な材料等は外国から持込られてしまうので、地元の販売業者は殆んど商売にならないといふこととで、余り歓迎していないと話を聞かされた。

ボルネオは東南アジアのうちに一番社会福祉の行きとどいていて、都市に空港、高層ビルなど、建設の工事になると外国から業者が進出して来るのを請負うケースが多く、その場合必要な材料等は外国から持込られてしまうので、地元の販売業者は殆んど商売にならないといふこととで、余り歓迎していないと話を聞かされた。

見受けることが出来た。

三笠代理店S、T、G社支店を訪ね、総支配人リッキー氏より建設業界の現状を聞く。なんとこちらも人口の数は限られているが、州政府の開発計画に従って機械を供給するしかないわけだが、今後は多機種の取扱うこととによって販路も自らが広げ得るとのこと。総支配人リッキー氏は積極的な新機種の取扱うて行くことを約束してくれた。

出発前は単独で西マレーシアの各販売店を訪問する予定であつたが、早くも我々の出張を知って、シタガポールに三笠代理店W社社長コワリー氏とゼネラル・マネージャー、フー氏がクワラルンプールの空港で我々を待ち受けておられたのは少々驚いた。早速ホテルまで案内して頂き、当地滞在中のスケジュールについて打ち合せを行った。

クワラルンプールはマレーシアの首都でゴムと錫に恵まれた国として良く知られている。ここマレーシアは古くから植民地として統治されたことに依り、西洋諸国の影響と長いイギリスの支配を受け、その間に大量に流入したインド人、中国人などが定着したため、社会的にも文化的にも複雑になり、典型的な複合社会を形成することになった。従ってマレー人、華人、インド人、サラワクの原住民といった多民族が融合したまま現在にいたっているので、文化的に特異なものをもち、まさに人種の坩堝の感を与えている。

古くからアラブ人の影響を受け、この国のマレー人のはほとんどが回教徒になったため、回教が国教にもなったため、首都クワラルンプールではアラブの世界と間違えるほど多くのモスク「回教寺院」があり、特に壮大なモスクはヤシの葉かげから見かけられる。

昭和三十三年サラワク、北ボルネオを含め、マラヤ連邦国家として独立した。以前はイギリスの影響があらゆる面に残っていて、日本からの進出は容易なものでなく、自動車と一部の製品以外はほとんど見かけることが出来なかつたが、今日ではいかに出来たか、これも日本との関係の深くなったことを物語っていると思う。

立して以来、市内整備、国土開発、国民生活の向上等を旗印に発展し、いまでは首都クワラルンプールだけでなく、主要都市には近代的なビルが建ち並んで新興国家にふさわしい発展ぶりを示している。殊に今回の出張でこの数年間の発展ぶりを眼のあたりに見て、その速さには実に驚かされた。そして緑を大切にしている国にふさわしい、美しく濃い緑の街路樹や、赤と白の壁、白と黒の色の屋根が周囲の緑に映えてその色どりのすばらしい光景を見るのが出来たのは何よりも楽しかった。

クワラルンプールの三笠代理店T社にて、中央はロウ社長、右はシタガポールの三笠代理店W社総支配人フー氏、左は筆者

クワラルンプールの三笠代理店T社にて、中央はロウ社長、右はシタガポールの三笠代理店W社総支配人フー氏、左は筆者

クワラルンプールの三笠代理店T社にて、中央はロウ社長、右はシタガポールの三笠代理店W社総支配人フー氏、左は筆者

クワラルンプールの三笠代理店T社にて、中央はロウ社長、右はシタガポールの三笠代理店W社総支配人フー氏、左は筆者

クワラルンプールの三笠代理店T社にて、中央はロウ社長、右はシタガポールの三笠代理店W社総支配人フー氏、左は筆者

クワラルンプールの三笠代理店T社にて、中央はロウ社長、右はシタガポールの三笠代理店W社総支配人フー氏、左は筆者

クワラルンプールの三笠代理店T社にて、中央はロウ社長、右はシタガポールの三笠代理店W社総支配人フー氏、左は筆者

クワラルンプールの三笠代理店T社にて、中央はロウ社長、右はシタガポールの三笠代理店W社総支配人フー氏、左は筆者

クワラルンプールの三笠代理店T社にて、中央はロウ社長、右はシタガポールの三笠代理店W社総支配人フー氏、左は筆者

